The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	米国の精神障害がある当事者における「リカヴァリ」の浸透
Author(s)	東田, 全央
Citation	響き合う街で. 2007, 42, p. 21-26
Version Type	AM
URL	https://doi.org/10.18910/72995
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

米国の精神障害がある当事者における「リカヴァリ」の浸透

東田全央

1. はじめに

「リカヴァリ（recovery）」が米国等の英語圏のメンタルヘルス領域においてキーワードとして頻繁に用いられるようになってきている．日本でも徐々に知られつつあり，たとえば，さいたま市内の当事者会（ウィーズ）と生活支援センターの共催で開催された日米精神障害者当事者交流会のテーマも回復（リカバリ）であった[1)]．

本研究は，リカヴァリという言葉や考え方が人びとに広く知られることや語られることの意味について検討したものである．本報告では，その検討を通して，「言葉が現実をつくる」[2)~3)]という言葉の力と可能性について考えたい．

2. 背景

Kraepelin による早発性痴呆に関する記述に表徴されるように，長年，精神障害については「慢性性(chronicity)」や「漸進的な悪化」が前提とされてきた[4)]．

しかし，近年，米国では，精神障害がある当事者の声をもとに，当事者と専門家の共同的な相互作用によって，リカヴァリが積極的に語られはじめた．そのことを示す一例として，図 1(2005 年 1 月現在における PubMed による英字文献の検索)から示唆されるように，1990 年代以降，リカヴァリがキーワードである学術論文等の文献数は増加傾向にある．

リカヴァリという言葉や概念は広く用いられるようになっただけではなく，その意味も多様化してきた．欧米のメンタルヘルス領域においては，少なくとも過去 200 年，リカヴァリという言葉は医療モデルの中で用いられることがあった[5)]．その一方で，1980 年代以降，医療モデルにおける支配的な言説に対抗する新しい意味を含むものとしてリカヴァリが主張されてきた．すなわち，リカヴァリは「その人の個人的で独特な過程として描かれる．それは，その人の態度，価値観，感情，目的，スキル，役割などの変化の過程である．［中略］リカヴァリは，精神疾患の破局的な影響を乗り越えて，その人の人生において新しい意味と目的を創り出すことを含む」[6)] ものとして語られてきたのである．

3. 先行研究と本研究の必要性

リカヴァリに関する先行研究は数多くある．とくに,「精神障害からのリカヴァリの過程とはどのようなものか?」,「精神障害からのリカヴァリを促すためにはどうすればよいか？」というテーマが多く見受けられる．

リカヴァリという言葉や概念の浸透についてはどうであろうか．たとえば，次のような指摘がある．「リカヴァリ・ナラティブは重要な資源である[中略]これらの物語は，支配的な荒廃ナラティブに挑戦し，それを覆す代替的な『対抗策』を与える[中略]リカヴァリについての第一人称の手記を共有することは重要である」[8)] というように，リカヴァリの物語を共有することの意味等が述べられている．加えて，当事者や専門家にとってリカヴァリはすでに自明のものになりつつあり，そのこと自体に意味があると言える．

しかし，先行研究では十分な検討がなされていない．したがって，リカヴァリという言葉や概念がどのように広まり，どのような意味があるかについて明らかにする必要がある．

4. 視点

本研究では，リカヴァリという言葉や概念の浸透について社会的表象理論 [9]の視点から検討した．社会的表象理論とは「社会に生じた『新奇な(unfamiliar)』事象・出来事が[中略]安定した社会的現実として，人々の日常世界に定着するまでの社会的構成の過程を記述，分析する理論」[9]である．

リカヴァリ *の日常世界への浸透について検討するにあたって，この理論の視点は有益な視点をもたらすと考えた．とくに，人びとの日常世界において科学的知識等の何らかの言葉等が知られ語られることで，それまで人々のあいだで馴染みない事象や出来事，体験等が馴染みあるもの(familiar)になるという視点を参考に検討することにした．

5. 調査の目的と前提

本調査の目的は，リカヴァリの浸透により，精神障害のある当事者においてどのような意味があるのかについて探索的に明らかにすることである．

なお，リカヴァリの浸透が積極的になされる時期については，暫定的に 1992 年以前と 1993 年以降を一つの区切りとした．その理由としては，学術論文等が増加していること(図 1)，1980 年代以前のリカヴァリに関する手記が初期のものとして位置づけられていること [10]，Anthony の象徴的な論文 [11]の掲載年が 1993 年であることが挙げられる．

6. 方法

本調査では，当事者の手記について質的内容分析を実施した．

手記については，米国の雑誌等において公刊され，かつ研究者 [12]がリカヴァリに関する研究において分析や引用しているものを中心に，のべ 34 名の手記を選定した．

分析の手続きは以下の通りである．はじめに，手記の記述についてエピソードや意味等のまとまりごとに分析単位として区分した．つぎに，手記の文中でリカヴァリの浸透に関する部分を抽出した．抽出した箇所で近似的な意味があるものについて集約し，異なる意味があるものについては再分類するという作業を繰り返した．

結果的に，5 項目（「リカヴァリの否定やあきらめ」,「リカヴァリを知るきっかけ」,「リカヴァリとしての体験の意味づけ」，「リカヴァリという言葉の意味」，「社会的に認められたリカヴァリ」）からなる分類項目と分類基準を作成した．そして著者を含む 2 名の評定者によって分類を行った．評定者間の分類において有意な一致は認められなかったが，適度な一致が認められた(k=0.42, n.s.)．2 名の評定が一致しなかった部分については協議のうえで再評定をしなおした．

すべての分類のあとに，1992 年以前掲載の手記と 1993 年以降掲載の手記における分類の比較を行った．

7. 結果

以下に，各項目における結果の概略を記す．ただし，数値を含む詳細な結果については，紙面の都合上，ここに記すことはしない．

1) 『リカヴァリの否定やあきらめ』

この項目に該当するのは，発病後に自己または他者によってリカヴァリ等が否定されたという体験に関する記述である．たとえば、次のようなことが語られていた．

*以下，断りがない限り，「リカヴァリの浸透」等と述べる場合，言葉および概念の普及とともに，リカヴァリが自明のものになること，すなわち社会的現実としてのリカヴァリの成立を含意している．

「私は専門家に[中略]精神病だった人や良くなった人のグループは何かないのか尋ねた．精神病者は良くならないのでそのようなグループはない，と言われた．」[13)]

このように，発病後に自己や他者によってリカヴァリ等が否定されたという記述が，1992 年以前, 1993 年以降掲載の手記のいずれにもあった.

2) 『リカヴァリを知るきっかけ』

この項目に該当するのは，他者等を通じてリカヴァリについて著者本人が知ったということに関する記述である．1992 年以前，1993 年以降掲載の手記のいずれにもあった.

リカヴァリという言葉や考え方を直接的に知る機会は, とくに 1993 年以降掲載の手記においてより広範に述べられていた．その具体的なきっかけとしては, ほかの当事者の体験, 当事者向けの研修などが記されていた.

3) 『リカヴァリとしての体験の意味づけ』

この項目に該当するのは，リカヴァリという言葉とともになされている著者本人の体験の記述である．1992 年以前，1993 年以降掲載の両方の手記に該当する記述があった.

1993 年以降掲載の手記においては, 他者の手記等を参照したうえで，リカヴァリという言葉を用いて体験を記述するものがあった.

「運の要素が確かに私の経験にもあり、私が『リカヴァリを継続させること』と呼びたいものは大変な作業である」[14)]

その一方で，次のような記述があった.

「私は，リカヴァしたとは本当に呼ばれたくない．狂気の経験から，私の人生を変える傷を負った．それによって，私が他者を助け，私自身を知ることができた。[中略]私はリカヴァしたのではない．私は乗り越えてきた(overcome)のである．」[15)]

これは，リカヴァリがラベルとして他者等によって用いられてしまう可能性を示唆する.

4) 『リカヴァリという言葉の意味』

この項目に該当するのは，リカヴァリの意味に言及している記述である．1992 年以前掲載の手記において，リカヴァリの意味に言及しているものは 1 つの手記のみであった。

1993 年以降掲載の手記のみにあったものとして，次のような記述がある.

「私にとって，リカヴァリは毎日あるいは 1 時間ごとの状態を記述する言葉である．」[16)]

この引用文の前にリカヴァリについての一般的な意味が語られているが，それを踏まえて著者本人の「個人的な意味」を述べているものと言える.

5)『社会的に認められたリカヴァリ』

この項目に該当するのは，リカヴァリが現実のものとして社会的に認められてきていることに関して言及している記述である．1993 年以降掲載の手記にのみ該当する記述があった．たとえば，次のような記述があった.

「メンタルヘルス・リカヴァリが私たちのあいだでますます起こっていることを知った．私は，自分自身と他者にとってのリカヴァリの過程に人生を捧げたいと思うに至った．」[17)]

このような記述は，リカヴァリという現実が，具体的事象や個人的な体験の生起に先立って，すでにあるものとして社会的にみなさ

れていることを示唆する．

8. 考察

1) 調査のまとめ

1992 年以前と比較して, 1993 年以降掲載の手記には「リカヴァリを知るきっかけ」,「リカヴァリとしての体験の意味づけ」等が質的により広範に見られた．そして，リカヴァリの浸透によって，それまで当事者にとって馴染みのなかった体験が馴染みあるものになるという可能性が示唆された．また，リカヴァリが浸透することにより，当事者等の希望を喚起し，そのこと自体が当事者にとってのリカヴァリを促すことも示唆される．

その一方で，否定的な意味で，リカヴァリは一種のラベルとなりうることを示すものがあった．このことについては後で触れる．

2) 本調査の限界と課題

本調査には様々な限界がある．ここでは 2 点のみ述べておく．第 1 の限界は，手記の分析だけでは，リカヴァリの浸透の全貌が明らかにはならなかったことである．第 2 の限界は、本調査は探索的であり，分析結果について一般化はできないことである. したがって, 多角的な調査や分析が課題である．

9. おわりに

1）日本におけるリカヴァリ

冒頭にも述べたが，日本においてもリカヴァリという言葉が広まりつつある．リカヴァリという言葉や考え方が広まれば,「あっ，そうか，自分たちの体験は，そういうことだったのか」[18] というように，馴染みのなかった体験が馴染みのあるものになるかもしれない．

しかし，日本では，リカヴァリという言葉は外来語である．また，リカヴァリは専門家を中心に知られる状況にあり，専門家によるトップダウン的な紹介になりがちである．そのため，当事者の言葉ではなく，専門用語としてのみ広がりうるという危惧がある．そうなれば，リカヴァリという名の新しいラベルが生まれるということにもなりかねない．

本報告では十分に述べることができなかったが，米国においては，当事者の声をもとに，当事者と専門家の共同的な相互作用の中で社会的現実としてのリカヴァリが生み出され，浸透してきた．すなわち，実践や研究および日常世界におけるリカヴァリの浸透には, 当事者が語り，その言葉を大切にしながら専門家が協力して広めていくという「協働的実践」[19]の過程が重要であったと言える．日本の実践や研究においても，どれほど言葉や概念に意味があろうとも，そのような浸透の過程そのものが重要となるのではなかろうか.

2）やどかりの里における言葉

本調査を踏まえて，やどかりの里の活動の一端についても言及しておきたい．やどかりの里では,「やどかり語」とも言える言葉, 様々なモデル，あるいは文化とも言うべきものがある．そのようなものは，当事者，家族，職員の日常的な話し合いや語り合いのなかで，あるいは会議や研修の場，出版物等のなかで様々に表現されている．

本報告の視点や調査から言えば，そのような表現によって，やどかりの里において大切にされるべきものを馴染みあるものや意識化できるものにしてきたと言える．そして，いまだ語られないものも含めて，社会的に普遍化していくという課題もある．今後も，当事者，家族、職員，市民等による取り組みによって，大切にしてきたもの，大切にされるべきものを言葉にしていくことが重要であり，それこそ本報告で伝えたかったことと重なる．

文献

1)「2006 年日米メンバー交歓会開催！～繋がり，拡がる交流～」『機関紙やどかり』 **36(9)**, pp. 4-5.

2) Berger, P.L., & Luckmann, T. 1967. *The social construction of reality: A treatise in the Sociology of Knowledge*. London: Allen Lane.（山口節郎訳1977.『日常世界の構成ーアイデンティティと社会の弁証法』新曜社）

3) Hartman, A. 1991. Words create worlds. *Social Work*, **36(4)**, pp. 275-276.

4) Kruger, A. 2000. Schizophrenia: Recovery and hope. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, **24(1)**, pp. 29-37.

5) Loveland, D., Weaver Randall, K., & Corrigan, P.W. 2004. Research methods for exploring and assessing recovery. In (Eds.) R.O. Ralph and P.W. Corrigan *Recovery in mental illness: Broadening our understanding of wellness*. Washington, DC: American Psychological Association, 19-59.

6) Anthony, W. 1993. Recovery from mental illness: The guiding vision of the mental health service system in the 1990s. *Psychosocial Rehabilitation Journal*, **16(4)**, pp. 521-538.

7) Smith, M.K. 2000. Recovery from a severe psychiatric disability: Findings of a qualitative study. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, **24(2)**, pp. 149-158.

8) Moscovici, S. 1984. The phenomenon of social representations. In (Eds.) Farr, R. & Moscovici, S. *Social representations*. Cambridge: Cambridge University Press, 3-69.

9) 矢守克也. 2001.「社会的表象理論と社会構成主義ーW. Wagner の見解をめぐって」『実験社会心理学』 **40(2)**, pp. 95-121.

10) Ridgway, P. 2001. Restoring psychiatric disability: Learning from first person recovery narratives. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, **24(4)**, pp. 335-354.

11) Anthony, W. 1993. *op. cit.*, pp. 521-538.

12) Jacobson, N. 2001. Experiencing recovery: A dimensional analysis of recovery narratives. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, **24(3)**, pp. 248-256.

13) Schmook, A. 1994. They said I would never get better. In (Eds.) L, Spaniol. and M. Koehler. *The Experience of Recovery*, Boston: Center for Psychiatric Rehabilitation, Boston University, 1-3.

14) Morisey, A. 2003. Recovery: Always a Work in Progress. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, **26(4)**, pp. 427-428.

15) Clay, S. 1994. The wounded prophet. *Recovery: The new force in mental health*, Ohio: Ohio Department of Mental Health.

16) Morisey, A. 2003. *op. cit.*, pp. 427-428.

17) Armstrong, M. 1994. What happened and how "What Happened" Got Better. In (Eds.) L, Spaniol. and M. Koehler. *The Experience of Recovery*, Boston: Center for Psychiatric Rehabilitation, Boston University, 52-53.

18) 杉万俊夫. 1998.「実践としてのグループ・ダイナミクス」『実験社会心理学研究』 **38(2)**, pp. 202-204.

19) 杉万俊夫. 1998. 前掲, pp. 202-204.

（本報告は研究の一部について簡略的にまとめたものである）

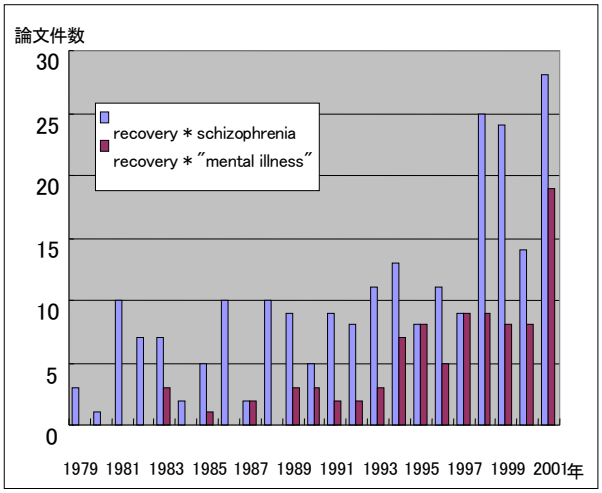

図 1. 1979-2001 年における"recovery"をキーワードとする文献件数の推移.

注：本稿は著者最終稿である。